

【タイトル】

私に義母の介護を押し付けていた夫「家を出て行くから一生ババアの面倒見てろw」→夫が出ていった瞬間、義母「さて、それじゃ私たちも準備しましょ」

【簡単な設定】

要介護になった義母

夫は当初、介護に協力的だったが、だんだん私に義母の介護を押し付けるようになる
その頃から浮気の影がちらつき始める

(ここではハッキリ浮気しているとは判明せず、夫の様子がおかしくなっていくなど匂わせ程度)

↓

ある日、夫が義母の通帳と印鑑を勝手に持ち出して家を出ていってしまう

テーブルに置かれていたのは離婚届と置き手紙

置き手紙『家を出て行くから一生ババアの面倒見てろ』(タイトル回収)

義母に申し訳無さそうに事情を説明すると「それじゃ私たちも準備しましょ」(タイトル回収)

↓

翌日、夫から焦った様子で電話がかかってくる

夫「母さんの通帳からお金が引き出せないんだけど…」

実は私は義母の通帳と印鑑を一緒に引き出しにしまっていたが、印鑑は通帳に捺されていたものではなかった

通帳と印鑑が一致しないことで銀行員に怪しまれ、慌てて電話をかけたらしい

(夫の様子がおかしいと思った私が義母の許可を得て別々の通帳と印鑑を入れておいた)

↓

私「そのままの状態じゃお金は引き出せないから、指定された場所に来てほしい」

実は私と義母は既に家を引き払い、バリアフリーのマンションに引っ越して一緒に暮らしていた

驚く夫に、私は夫の悪事の証拠を突きつける→制裁

【登場人物】

主人公(私)：ハルカ(33歳・女性)明るくハキハキした性格。義母とは仲が良い。

夫：アキオ(35歳・男性)悪役。浮気をしている疑惑がちらほら見え隠れしている。浮気相手に貢ぐために義母の預金を狙っていた。

義母：フユミ(65歳・女性)主人公の味方。要介護の状態だが、主人公と一緒に制裁に乗

り出す。

【本文】

夫『家を出ていくから一生ババアの面倒見てろw』

ある日突然、そんな内容が書かれた手紙を置いて、姿を消してしまった夫。

それと一緒に置かれていたのは、離婚届でした。

私（自分の母親をババア呼ばわりなんてひどすぎる！それに、こんな一方的に離婚なんて…）

しかし、私には夫がどこに行ったかなんてわかりません。

仕方なく、寝たきりの義母に申し訳なく思いながら事情を説明すると、彼女は思いがけないことを口にしたのです。

義母「あら、そうなの？それじゃ私たちも準備しましょ」

そこから私たちは、夫をぎゃふんと言わせる計画を実行に移すことにしました。

それは半年前のことです。

家事をしていると、夫のアキオから電話がかかってきました。

夫「ハルカ、落ち着いて聞いてくれ…母さんが、交通事故にあった…」

私「えっ！？嘘…」

彼は深刻そうな顔で言うことには、義母が乗っていたバスがトラックにぶつかって横転し、義母はその衝撃で足を骨折して、これから寝たきりになるだろうということでした。

夫「これから母さんの介護で大変になると思うけど、2人で協力して頑張ろう」

義母の見舞いに病院に行くと、先に病室にいたアキオは私の手を握り、目で訴えかけてきたのです。

私「もちろん。一緒にお義母さんの介護、頑張りましょうね」

私は義母と仲が良かったので、2つ返事で引き受けました。

義父をすでになくしていた義母は、同居を申し出た私たち夫婦に感謝していたのです。

私としても、義母の家に住まわせてくれている恩を返したいと強く望んでいました。

こうして、私の介護生活は始まったのです。

当初、夫と協力しての介護はうまくいっているように感じていました。

しかし、ここから少し、雲行きが怪しくなっていくのです。

夫「ごめん！残業で遅くなるから、母さんのこと頼んだよ！」

私「そうなのね、わかったわ」

ところが、深夜に帰ってきた夫からは、女物の香水の匂いがプンプンしていました。

当の本人は全く気付いていない模様。

私（明らかに残業…ではないわね…）

浮気を疑いましたが、ここで問い詰めても確かな証拠がありません。

私はうっすらと、今後の生活について不安を抱くようになったのです。

残念ながらその予感は的中して、夫は何かと言い訳をして私に介護を押し付けるようになりました。

夫「上司と飲み会で断れなくてさあ～」

私「また？週に何回飲み会に行ってるのよ？」

夫「色んな人と飲みに行ってるんだよ。これも人脈を増やすためなんだ、わかってくれ」

そのわりには、彼の給料はさっぱり上がる心配がないのです。

おまけに、家に帰ってくるたびにむせ返るような香水の甘ったるい匂いが部屋に充満して、私は不愉快な気持ちになったものでした。

どんどんおかしくなっていく夫の言動。

そして、とうとう最悪の事件が起こったのです。

ある朝、目を覚まして朝食を作ろうと思っていたときに、私は『それ』に気がきました。

ダイニングテーブルの上に、紙が2枚、置かれていたのです。

ひとつは封筒の中に入っていた手紙。

『ハルカへ』と書かれたその封筒を見て、私は何とも言えない不安を感じました。

恐る恐る手紙を開くと、そこには何ともひどい言葉が書かれていたのです。

夫『俺は家を出て行く。お前は一生ババアの面倒見てろ』

もう1枚は、離婚届でした。

しかも、夫の分の署名が記入済みだったのです。

私はサーッと血の気が引きました。

私「なんでこんな急に…しかも自分の母親をババア呼ばわりなんてひどいわ！」

さらに、もしかして…と思って家の中を調べてみると、義母の通帳と印鑑がなくなっていることが分かったのです。

義母が自由に動けないのをいいことに、家出するときに持ち去ってしまったのでしょうか。

私は怒りで目の前が真っ赤になる心地でした。

私はこの状況を義母にどう説明したものか…と頭を悩ませましたが、結局彼女に報告するしかありません。

しかし、申し訳なく事情を説明すると、彼女は大笑いしたのです。

義母「あら、そうなの。それじゃ、私たちも準備しましょ」

私と義母は、実のところ、夫のすることに気付いていました。

彼の思惑通りに行かないように、少し細工をしておいたのです。

そして、私たちは、夫を懲らしめてやるために、とある計画を実行に移したのです。

そして、夫が家を出ていってから翌日。

私家事をしていると、電話がかかってきたのです。

夫「もしもし？俺だけど…」

私「あら、アキオさん？どうしたの？」

夫はずいぶん焦った様子で、私に電話をかけたのも後ろめたいようでした。

夫「実は母さんの通帳からお金が引き出せないんだけど…」

彼の説明することには、銀行に通帳と印鑑を持っていってお金を下ろそうとしたのですが、その印鑑は通帳に捺されたものではなかったということです。

それで、銀行員に怪しまれた夫は、慌てて私に電話をかけてきたというわけ。

夫「これはいったい、どういうことなんだ！通帳と一緒に引き出しに入っていたから、てっきりセットになってるのかと思って持ってきちゃった！」

私「そんなの、あなたの早とちりでしょ？」

もちろん、別々の通帳と印鑑を入れておいたのはわざとです。

私が寝たきりの義母の許可を得て、引き出しの中にしまっておいたのを、夫が勝手に勘違いして持っていっただけ。

私「私、前々からあなたの様子がおかしいとは思ってたのよね」

夫「なんだと！ふざけるな！」

夫はカンカンに怒っていますが、私は素知らぬふりをしていました。

私「とにかく、そのままの状態じゃ一生お金は引き出せないわよ。今から指定する場所に来なさい」

私はとある場所を教えて通話を切ったのです。

1時間後、インターホンが鳴り、その画面にはアキオの姿が映っていました。

エントランスの自動ドアをボタンで開けて、夫を部屋に招き入れると、落ち着かない様子でキョロキョロと部屋の中を見回す彼。

夫「いつの間に、こんなマンションを用意したんだ？」

私「あなたが浮気していると勘づいたときから、お義母さんと相談して買ったものよ。あなたが家を出て行ってからすぐに引っ越したの」

夫はギクリとしたようでしたが、「なんだ、気付いていたのか」とニヤリと笑ったのです。

私「そりゃ、あんなに香水の匂いをプンプンさせてたらね。お義母さんも車椅子で動けるように、バリアフリーの介護付きマンションを買ったのよ。これで私も働きに出られるわ」

夫「それは素晴らしい。俺もラクして暮らせるってもんだ」

私「は？あなた、この期に及んでまだ私たちと住む気なの？」

自分で家出をしたくせに、ずいぶんと自分勝手な夫に、はらわたが煮えくり返るようでした。

私「悪いけど、そうはいかない。もう離婚届は出してあるから」

夫「なんだって！？聞いてないぞ、そんなの！」

私「あなたが手紙と一緒に置いていったんじゃないの。忘れたの？」

私は呆れ返ってしまったのです。

夫が家を出ていった日、私は即座に離婚届にサインして、役所に提出しました。

それでもう、離婚は成立しているのです。

夫「それでも、俺は母さんの子だ！一緒に住む権利がある！」

私「その母親を見捨てたくせに、図々しいわね…」

夫「うるせえ！お前が出てけ！」

私とアキオが口喧嘩していると、きい、と車輪を回す音がしました。

車椅子に乗った義母が、こちらにやってきたのです。

夫「ああ、母さん！元気そうでよかった」

にこやかな夫とは正反対に、厳しい顔つきをしている義母。

義母「ハルカさん、あれを出してちょうだい」

私「はい、お義母さん」

私はタンスの引き出しを開けると、書類をテーブルに置きました。

夫「な、なんだよ、これ…」

私「興信所に依頼して調査してもらった報告書よ。あなたの浮気を調べてもらったの」

報告書をチラリと見た夫は、「ハン」と鼻で笑って突き返したのです。

夫「いまさら浮気調査なんかしたところで、何になる。俺が浮気をしていたのはもう知っているんだろ？」

私「浮気をしていることは認めるのね？」

夫「ああ、そうだよ！その彼女とこのマンションで一緒に暮らせば、楽ができる！離婚したお前には居場所なんてないだろ？」

ふてぶてしいにもほどがある夫を、黙ってにらみつける私。

それを私の敗北だと思っているのか、調子に乗ったアキオはここぞとばかりにベラベラと喋りだしました。

夫「俺の彼女は、お前なんかよりもずっと若くて可愛い。きっと母さんも気に入るさ」

義母「あら、『一生ババアの面倒見てろ』って手紙に書いたのはどこの誰だったかしらね？」

夫「母さん、過去のことは水に流そう。これからは、輝かしい未来について話そうじゃないか！」

1日前のことは、彼にとっては、すでに過去のことになっているようです。

それに、「水に流そう」なんて夫の言えるセリフではありません。

ムカムカした私は、一気に彼を追い詰めることにしました。

私「キラリちゃんとの結婚は、私はオススメしないけど。するにしても、お義母さんを巻き込まないほうがいいわ」

夫「あ？なんでお前がキラリちゃんを知ってるんだ…？」

夫はキョトンとした顔で、私を見ていたのです。

夫「ああ、そうか、調査報告書に書いてあったんだな？キラリちゃんに嫉妬して、本当にお前は見苦しいな」

私「報告書、ちゃんと最後まで読んだほうがいいわよ」

せせら笑う夫を無視して、私はそれだけ言うと、報告書をもう1度彼に突きつけました。

夫「ったく、こんなもん何度読んでも一緒だって…」

しかし、書類の最後のページを見た夫は、目を丸くしていたのです。

夫「け、結婚詐欺師！？」

私「そうよ。あなたの愛しのキラリちゃんは、あなたの財産を狙っている。実際、もうすでに、だいぶお金を注ぎ込んだんじゃない？」

夫は顔を真っ青にして、食い入るように報告書を見ていました。

夫「う、嘘だ、こんなの…だって、もう結婚式場だって予約してるんだぞ！？」

私「ご愁傷さま。きっと式場のスタッフもグルになっているのね」

夫「そんな！もう結婚費用は振り込んだんだぞ！？」

私「今頃キラリちゃんは外国へ高飛びかしらね？」

アキオはまだ信じられないようで、スマホを取り出して浮気相手に電話をかけますが、「おかけになった電話は、現在使われておりません」というアナウンスが、こちらにも聞こえてきたのです。

彼はガックリと肩を落とし、膝から崩れ落ちました。

私「で、なにか言うことは？」

夫「申し訳ございませんでした！」

夫は素早い寝返りを打って、土下座を始めたのです。

夫「こんなはずじゃなかったんだ…。キラリちゃんは社長令嬢だと聞いていて、結婚すれば逆玉の輿だと浮かれてたんだ…」

私「それなのに、なんであなたがお金を払うことになってたわけ？」

夫「投資のつもりだったんだ…。キラリちゃんのおねだりにうまく合わせていれば、結婚さえしてしまえば今度は俺がカネを自由に使える番だと思って…」

義母「ちょっと冷静になって考えればわかるだろうに、ホントお前は馬鹿だね」

母親に説教されて、夫は床に座り込んだまま、背中を丸くして小さくなっていました。

私「お義母さんの預金を勝手に引き出そうとしたのも、キラリちゃんに貢ぐため？」

夫「ああ…母さんがたんまりとカネを貯めていたのは知っていたからな。ブランドバッグの1つでも買って、キラリちゃんの機嫌を取ろうと思っていたんだ…」

義母「それで、ご機嫌取りに買い与えているうちに自分のお金がなくなった、と…はあ、こんなバカ息子に育てた覚えはないんだけどねえ」

大きくため息をつく義母に、夫はシュンとしてしまったのです。

夫「母さん、ハルカ。今からでもやり直せないかな…？」

私「は？無理。自分が今までやってたことを思い出してみなさいよ」

義母「私も、こんなバカ息子とは一緒にやっていける気がしないねえ」

夫「そ、そんな…！だって、家ももう売り払っちゃまったんだろ！？住む場所がないよ！」

私と義母にすがりつこうとするアキオを、私は振り払いました。

私「そんなの私たちの知ったことじゃないわよ！それと、あなたには浮気の慰謝料も払って

もらうからね！覚悟しなさい！」

夫「ハァ！？このうえ慰謝料まで払えるかよ！母さん、助けてくれよお！」

義母「自業自得だろう。私はアンタをもう息子とは思わない。話は終わりだよ、とっとと出ていきな！」

それでも夫は駄々をこねてマンションに居座ろうとしたので、私はマンションの管理人さんに連絡を取り、警察を呼んでもらってアキオを叩き出してやったのです。

その後、夫に慰謝料 200 万円を請求。

アキオは慰謝料を支払うお金がなく、借金して支払ってもらうことにしました。

そのとき、夫はどうも怪しいところからお金を借りたらしく、職場に怖いお兄さんが押しかけたそう。

それで会社に居づらくなった彼は、仕事を辞めて職を転々としますが、最終的にカニ漁船に乗せられて、その後の行方は知れません。

ただ、毎月きちんと分割で慰謝料が支払われているので、私たちにとっては問題ではないのです。

私は仕事を始めて、介護付きマンションで義母と一緒に暮らしています。

私が出かけている間もマンションに介護士がいて、義母のお世話をしてくれるので、だいぶ生活が楽になりました。

これから私たちの未来はいい方向へ向かっていくと思います。

私「お義母さん、行ってきますね！」

私は暖かい日差しの中、職場へ向かって歩き出したのでした。